

…おそれ知らずのぼうけんしゃたちが、ノバキッドビルにあつまる。

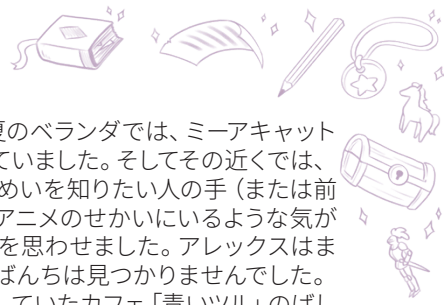
ア

レックスは、しんぱいでした。けっきょくのところ、友人たちは、でんせつのまほうの森を通して、きょうあくなグレムリンの国までたびをしてくれるようにアレックスにたのみました。とちゅうで何が起こってもおかしくありません。アレックスは、自分のことはしんぱいしていませんでしたが、お母さんとお父さんはしんぱいするかもしれないと思いました。もちろん、人間かいでは、まほうかいとは時間のたちがちがいますが、それでも、アレックスがいけないことに気づくかのうせいがあります。そこでアレックスは、わがしこい（またはそう自分で思った）計画を思いつきました。友だちのダニエルとそうだし、アレックスのりょうしんに、アレックスはダニエルの家に来てひとばんとまると、つたえてもらうようにしました。そしてじっさいは、アレックスはハイキングにひつようなものをすべてリュックサックにつめました。かいちゅうでんとう、まほう言語のじしょ、きがえのくつした、ボトル入りの水、そしてポテトチップスのふくろ。アレックスはリュックをとじ、いきをすって、はいて、そして大声で言いました：

“Novakidville!”



アレックスがふたたび目をあけると、そこはノバキッドビルのにぎやかな通りでした。そこには町の生活がありました — 通りには、人間になじみのあるどうぶつも、おとぎ話の生きものも、たくさんいました。サイは買いものをするおきゃくを自分の店に楽しげによびこみ、ゾウは大きなフライパンでりょうりを作り、ユニコーンは地元のカフェ「スイートウォーター」で、カードやサイコロであそんでいました。どんな人でも自分の



すきなアイスクリームが見つかる「カフェ・アイス」の夏のベランダでは、ミーアキャットとマングースのオーケストラが、ふしぎなきよくを歌っていました。そしてその近くでは、年とったかしこいドラゴン、アスピダスが、自分のうんめいを知りたい人の手（または前足）の線を読みとっていました。アレックスは、何だかアニメのせかいにいるような気がしました。家、店、そして通りのぜんたいが、東の国々を思わせました。アレックスはまわりを見回しましたが、通りのなまえや建物についたばんちは見つかりませんでした。ルナとアストロが「うしろ森」に行く前にあつまろうとしていたカフェ「青いツル」のばしょがわかりません。うんよく、そこにウサギがかけよってきました。

「やあ！ノバキッドビルとまほう学校のさいしんニュースだよ！ノバキッド・タイムズのさいしんごうでしか読めない。まほう言語のけんきゅうにおけるはっけん、きた学生のかなぞとそうさ。新しく出たまほう言語の本は、読むべきか、読まざるべきか？ひとつ、買わないかい？」ウサギはきたいをこめて、少年を見上げました。

うーん、「カフェ 青いツル」のばしょが書いてあったら買うかな。」とアレックスは答えました。

「なんだ、『青いツル』を探しているのかい？言ってくればよかったのに。あそこだよ、まっすぐ行って、左にまがる。そしたらすぐさ。」とウサギは言いました。「新聞買ってくれるかい？」

「わかった、もちろんだよ」アレックスはしょうちし、星を1つ出して新聞を買いました。

星は、まほう学校のあるまほうかいのお金なのです。べんきょうをがんばった学生は星をもらい、それらをノバキッドビルで本やまほうのアイテムを買うためにつかうことができます。アレックスはよくべんきょうしたので、ほしいものは何でも買えるだけの星をもっていました。でもふだんは星をつかうことはなく、だいじな時のためにとってあったのです。

「ごきげんよう！」ウサギは後ろからさけび、道を走りさって行きました。

アレックスはウサギがゆびさした方にすすみしました。しょくじのはいたつのごとをしているカンガルーたちが、アレックスをビュンとおいぬいていきました。ゾウたちがカンガルーたちのカバンにちゅうものしなを入れると、カンガルーたちは楽しげに、強い足でおきゃくの家の方にジャンプしていきました。角の店では、パンダさんが、のんびりと、めに後でまぜるキノコをあまずつぱいソースでいためていました。それから、まほうのつえを売っているクマの店がありました。もちろん、まほう学校ではつえをつかうのはあまり人気がありません。まほう言語のじゅもんで何とかなるのに、つえをつかうりゆうがあるでしょうか？しかし、それでも、ノバキッドビルのまほうつかいの中には、ベルトにすてきなつえをつけて、かまわず歩き回る人たちがいました。

ついに、アレックスは左にまがって、小さなせまい道に入りました。ここは、にぎやかな通りとくらべて、ややしずかでした。せまい道のおわりには、広々としたサマーテラスのある大きなたてもがありました。テラスにつづくかいだんの上には、「青いツル」と書かれたきれいな色のかんばんがあり、ほかでもない、青いツルのしゃしんがかざられていました。

近づくと、アレックスはすぐに、ルナとアストロ、それにだれか知らない人がテーブルに座っているのを見ました。ウサギは正しいばしょを教えてくれたのです。アレックスは手にもった新聞を見てほほえみました。なんていいウサギに出会ったことか。



「アレックス!アレックス!やっと来たね!」

「やあ、ルナ!やあ、アストロ!」

「わたしのなまえはマーティーです。 よろしく、新しいお友だち!」マーティーはきみょうな声でじこしょうかいしました。

「こんにちは、ぼくのなまえはアレックスです。はじめまして!」

アレックスは友人たちとテーブルにつきました。

「よし、あとはベラをまって、計画をくわしく話し合ったらしゅっぱつできる。」とアストロは言いました。

「わたしちょっと、こわいんだけどお。」とルナは大きな声で言いました

「本によると、まほうの森でもっともこわいばしょは、もやのかけはし、歌う草地、きょうふの林、ぜつぼうのぬまだ。これらのばしょに来てしまったら、インターネットで見つけたルールにしたがおう。できたら、それをさけるようにしましょう。」

「ああ、本当におそろしそうなかんじ。とくに、ぜつぼうのぬまなんて。」ルナはそう言い、こわさでしっぽの毛をさか立てていました。

「しっかりしろよ、しんぱいないよ。すべてうまくいくさ。まほうの森からはすぐに出られるよ、マーティーが古い地図をもっているからね。それに、グレムリンはぼくたちに何もできないさ、まほう言語も知らないんだから。ゆくえふめいの学生をとりもどし、じけんをかいけつし、そして...」アストロはさいごまで言うひまがありませんでした。



「そして、ノバキッド・タイムズのトップをかざるんだ。」とアレックスがつけくわえました。

「そして、森の中のこれまで知られていなかった新しいしゅるいのしょくぶつをたんさくするのね。こんにちは、みんな！」ちょうどそこに来たベラが言いました。

「ああ、ベラ、こんにちは！あなたをまつたのよ！」とルナがさげびました。

「やあ！いいぞ、これでみんなそろったね！」アストロが元気よく言って友だちをしょうかいしました。「こちらはアレックスとマーティーだ。」

「こんにちは。」マーティーとアレックスは、ほとんど同時に言いました。

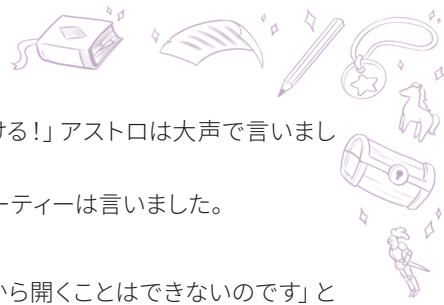
「マーティー、出入り口について教えてくれないか」とアストロはすぐに言いました。

「むかしの本によると、出入り口は町の外のかべにあり、とくべつなじゅもんでだけ、ひらくことができます。」

「あなたはそのじゅもんを見つけたの？」とルナがたずねました。

「もちろんです！マーティーは見つけるべきものをすべて見つけます！」マーティーはじしんをもって言いました。





「素晴らしい!ならこれでいつでもキャンプに行ける!」アストロは大声で言いました。

「ひとつだけ、小さなもんだいがあります。」とマーティーは言いました。

「それは何?」とベラがたずねました。

「出入口は中からしかひらけません、うしろ森から開くことはできないのです」とマーティーはせつめいしました。

「じゃあ、どうやってもどるのよ?」ルナはこわがってたずねました。

「新しい出入口を作ることはできます。しかし、グレムリンが学校に入らないように、すぐにとじるひつようがあります」とマーティーは言いました。

「それだけかい?」アストロはよろこびました。「まあ、それならかくじつにできるよ!」

数分後、なかまたちはカフェを出て、むかしの本によれば出入口があるという、町はずれにむかいました...

